

走り読み文学探訪リバイバル(その6)

「サバンナ」(神話伝説シリーズ) 著者 白土三平

小学館(1977. 8. 1発行)485円(300p)

紹介者: 榎本博康

[紹介]

忍者武芸帳やカムイ伝の白土三平が、長い沈黙の末に執筆を再開した、その最初の劇画である。台詞がなく、一切の解釈が読者の感性に委ねられている。

全裸でサバンナを長駆旅する女が居る。疲れはて、水場に走り、豹と戦い、乾期に耐え、雨に躍動する。泥をこねて土偶を作るが、ついに男を見つけて走り寄り、彼の槍に刺しぬかれる。垂れた血が土偶に滴り、男女の赤ん坊となる。

男は赤ん坊を育て、少年と少女になる。乾期に食料が不足し、争いの中で男は少年を殺そうとし、逆に殺られる。二人は解放され、笑い、夫婦となる。

その少女が母となり、男女の子供を連れて狩りをする。不覚にもガゼルの角に刺され、母は死ぬ。幼い二人は生きて、成長する。屈強な青年になり、巨大な水牛を倒して村の一員となる。兄弟は夫婦になる。やがて青年は水牛と命を引き替え、女は悲しみの中で、男女の赤ん坊ととかげを産む。

とかげはとてつもない大食で、恐竜のような怪物に成長していく。やがて怪物は人間を支配するようになる。このような話が怪物の死まで延々と続く。



[感想]

最近、「イブ仮説」と言われるものが注目されている。世界中のさまざまな地域に住む人々の細胞を採取して、そのDNAを分析した結果、人類の共通の祖先は、約20万年前にアフリカ大陸中央部にいた、一人の黒人女性であるという。彼女を人類のイブと呼ぶ。丁度、今夕の新聞に、イブの足跡とも言える化石が、ケープタウン北で発見されたと報じられている。

白土三平がこの物語を描いた頃は、このイブ仮説は無かったが、この仮説を念頭に置いて読むと、冒頭の女の孤独なサバンナの旅が理解できるのではないか。歩くこと、走ることは人間としての根元的な行いであり、それが存分に表現されている。

良く言われていることだが、天候の変化と森林の後退に伴い、人間の始祖は森からサバンナに降り、そして直立歩行を完成させていった。直立歩行によって両手が自由になり、それが知能の発達を促し、また体頂に頭を置くことによって、脳の重量化を可能としたわけである。

また、脳の発達には人類の長い旅があったとも言われている。その中で体毛を失ったとも。このように、人は2本の足で歩き、走る中で自分自身を、人間として造っていったということらしい。

所で、人間の走りは動物と全く異なる。動物では、常に重心が4本足の間にあり、駆けるには地面を前から後ろに蹴らなくてはならない。しかし、人間は2本足なので、直立して体を前

傾させれば、重心は足裏から先に移動する。ここで、地面を押し下げのようにキックすれば、前に走ることができる。決して地面を引っかいて進む必要がない。実際にこの動きを意識して走ると、非常に長く走り続けることができる。これが、人間が他のいかなる動物達よりも長く走り続けられる秘訣である。私はこれを、「飛ぶ」と呼んでいる。奇しくも、日本各地の方言で、走ることを「とぶ」と呼んでいるが、飛ぶように走るとき、人は自らを人間として形成し、長距離を旅することができる。

所で、最近知って驚いたのだが、短距離でも飛ぶように走ることが「発見」されている。1991年、東京の第3回世界陸上で、カール・ルイスら世界のトップ・スプリンターの走りを撮影し、分析した結果、上記のように走っているのが分かったという。従って切れ味のよい推進力は、前傾による重心の移動をスムーズに乗せる、腰の回転にある。この分析に基づいて、最近の日本の短距離選手は育成されているのだという。

脱線が過ぎてしてしまっただが、本書に戻る。母系のミトコンドリアを分析した結果、人類はひとりのイブを祖先に持つことが分かったとして、アダムはどうか。彼は常に早世する。この話では、性交と誕生が繰り返し描かれるが、アダムは往々に早世する。イブこそが、人類の現在への道筋を形成するものとして描かれる。

では彼女が産み落とした恐竜とは何であろうか。それは文明なのかもしれないし、迷信などの人々の心のうちに宿る恐れなのかもしれないし、宗教かもしれない。これはなかなか言うのに勇気がいるが、総ての災いは女から産み落とされるとも言われている。これは間違いない。

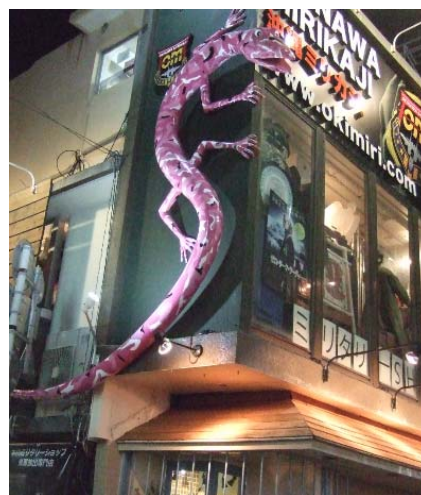
(1997. 8. 15)

[リバイバル感想]

本書は小学館コミックとして648円+税（2000/9発売）として購入できるようだ。良かった。

さて、この作品は人類の始まりと現在、そして未来を描いている、ページ数では無く、その構想により大作である。いや、超々大作である。

私の遠い記憶の中にも、サバンナで暮らした頃の断片が残っているかもしれない。瞬時の眩暈（げんうん）の中でそのような影を見るのだろう。そして現在に至るまで、次々と現れる巨大なトカゲとの共生を強要されている、人類は。いやトカゲという環境の中で暮らす日常であり、トカゲ無しで生きることはできない。トカゲを倒しても、すぐに次のトカゲが現れるのだから。



那覇市国際通りのトカゲ(2013年)

(2020. 6. 04)